

## 植民地大学の人類学者：泉靖一論

人文学系教授 中生 勝美

キーワード：京城帝国大学、泉哲、オロチョン族、蒙疆学術探検隊、西ニューギニア資源調査団、  
在外同胞救護会救療部

### はじめに

第二次世界大戦の敗戦は、日本の大きな転換点である。アカデミズムの世界も、敗戦を契機に大きく変化した。戦前の人類学は、調査対象を日本の植民地と占領地を中心に展開されていたが、敗戦によってフィールドワークの地域は喪失し、研究環境は大きく変化した。それにもかかわらず、日本民族学協会は敗戦の翌年に定期刊行誌『民族学研究』を再刊し、戦後の再起動は早かった。では戦前と戦後の人類学は、いったい何が変わり、何が変わらなかったのでしょうか。従来の人類学史では、戦前と戦後の連続性ではなく、断絶を強調して記述されてきた。本稿は、戦後の日本の人類学を支えた主要な人類学者である泉靖一に焦点を当て、戦前と戦後の連続性を考えてみたい。

泉靖一は、1930年前後に朝鮮の京城帝国大学で人類学の専門教育を受け、朝鮮および満洲でフィールドワークの経験をつんだ上で、アジア・太平洋戦争の時期に日本軍が占領していたニューギニアで調査をおこなった。泉と同様に、植民地台湾では、馬淵東一(1909-1988)が台北帝国大学で人類学を学んでいた。泉と馬淵の二人は、いずれも戦後の人類学を支えた重要な人類学者であるが、彼らが二人とも戦前の植民地帝国大学で人類学の基礎的トレーニングを受けたことは、人類学と植民地の関係を暗示している。彼らは戦前に植民地で教育を受け、植民地や占領地のフィールドワークで人類学研究の基礎を築き、戦後、泉は東京大学、馬淵は東京都立大学で人類学を講じて、それぞれ学生を育成してきた。いずれも、教職についてからの影響力を重点的に語られることが多いが、植民地での経験が、いかに戦前から戦後をかけて生きた人類学者にとって重要かという観点が、彼らの戦後の展開を理解する上で不可欠と考えられる。

本稿では、人類学研究が戦前と戦後で連続的に展開していることを理解するために、泉靖一の植民地経験を明らかにすることを主眼としたい<sup>1)</sup>。

### 1. 京城帝国大学在学中の学問形成

#### (1) 泉靖一の人類学

泉靖一は、1915年東京に生まれた。1927年12歳のときに、父親の泉哲<sup>あきら</sup>(1873-1943)が明

治大学から京城帝国大学法文学部へ転任したので、泉一家は現在のソウルに転居した。泉靖一は1933年に京城帝国大学予科に入学、1935年に法文学部国文学科へ進学した。この時期に、泉は本格的な登山を始め、大学入学とともにスキー山岳会、続いて学友会山岳部を設立し、朝鮮の山を登攀した。

1935年の暮れに、泉は済州島の冬期登山で仲間を失い、そこで地元のシャーマンに触れて人類学に関心を抱いた。ちょうどその頃、秋葉隆が巫俗の研究で済州島のシャーマニズムについて論文を書いていたので、泉は秋葉を訪ねた。その時、秋葉は泉にマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』（1922年）を読むことを勧め、泉はこの本を読んで人類学を専攻しようと決心した。

泉は、1936年から37年にかけて済州島を何度も訪れ、1938年に「済州島：その社会人類学的研究」を卒業論文として提出した。また、卒業前に大興安嶺へ行き、オロチョン族の調査をおこない、赤松・秋葉の助手としてゴルジ族の村を訪ねて報告書を書いている。1938年の夏に、前述した京城帝国大学蒙疆学術探検隊に加わり、内蒙古と小五台山の調査をした。1938年には、京城帝国大学法文学部助手に任命された。1939年から41年までは軍隊に入隊し、41年10月から京城帝国大学理工学部助手兼書記として復職している。1943年に太平洋協会の要請で西ニューギニア資源調査団の一員としてマノクワリの調査、年末に大興安嶺オロチョン族の調査をしている。1945年に京城帝国大学大陸資源科学研究所が新設され、その囑託となり、第一次調査隊として内蒙古・北京で調査をするが、敗戦となって中止して帰郷した。戦後は、医療関係の団体を結成して在外同胞の引き揚げ救済事業に専念した。1949年に明治大学助教就任、1953年には東京大学教授となり、石田英一郎と（1903-1968）ともに東洋文化研究所と教養学部を兼任した。八学会連合による対馬調査（1950年）、沙流川アイヌ調査（1951年）、社会的緊張の一環としての日本人の人種的偏見、立川の街娼調査（1951年）、ブラジル日系移民の勝ち組・負け組調査（1952年）、さらに1958年から東京大学アンデス地帯学術調査団の中心メンバーとしてペルーのコトシュ遺跡を発掘するなどで国際的に高い評価を受けた。寺田和夫（1928-1987）は、泉靖一を紹介する文章で、「理論的構築よりも実践的な問題提起にすぐれ、著書やマスコミを通じて文化人類学の普及に足跡を残した」と評価している。寺田は、さらに国立民族学博物館や野外民族博物館リトルワールドの設立に大きな役割を果たしたと結んで、組織者としての功績を強調している（寺田 1987：51）。泉は、1970年に東洋文化研究所所長に就任したが、その年に亡くなった。

蒲生正男（1927-1981）は、泉靖一の研究を4つに時期区分している。第1は戦前の京城帝国時代の済州島・満洲・内蒙古・ニューギニアへの探検から学問へ移行する時期。第2を終戦直後に明治大学から東京大学へ移るまでの経済安定本部の水没補償問題調査とブラジル日系人調査の時期。第3はアンデスの先史考古学的研究の時期。そして第4を晩年の1、2年、社会人類学や先史考古学の枠を越えて、泉靖一固有の人類学に昇華していた時期に区分している。蒲生は第2期の時に泉から直接社会調査の指導を受けた弟子であるが、泉の関心が社会人類学から先史考古学に移った第3期になって、アマゾン調査に同行している（蒲生

1972: 1-3)。

泉靖一は、馬淵東一とならんで、植民地で育成された人類学者である。自伝<sup>2</sup>、妻の随筆、伝記などから、泉靖一の足跡は明らかになっている。ここでは、泉の研究の基礎を築いた戦前の活動に焦点を絞って述べたい。

## (2) 泉哲の役割

泉靖一の世界情勢を見る目は、父親の泉哲から大きな影響を受けている。泉靖一の自伝『遙かな山々』では、父について4回言及している。最初は幼少期の頃の思い出、次に泉哲が1937年に満鉄からの委託調査で中部・南部中国を視察したときに秘書として同行した旅行、3度目は1943年に父の訃報を受け取ったとき、最後は終戦後に京城から引き揚げて博多の在外同胞援護会で活動中に、父の弟子から明治大学の助教授への就任を請われたときである。

泉哲は、札幌農学校を中退してアメリカへ行き、ロサンゼルス大学で農業経済学、コロンビア大学で国際法を学んだ。16年間アメリカに滞在し、1913年に帰国して東京外国語学校の教授になった後、明治大学に政治経済学部創設にかかわり、専任教授となった(泉 1972b: 161-162、浅田 1994: 184)。泉哲は、保谷に3000坪の土地を借りてアメリカ風の農園を作り、自宅の一室を日曜学校として開放し、それ以外の日を生活協同組合事務所として使って、アメリカで学んだ大農法の実践をしていた(藤本 1994: 45)。この農場は、高橋文太郎(1903-1948)という学生の実家から借りた土地だったが、彼は明治大学の山岳部幹部であるとともに、民俗学に関心を持ち、小学生であった靖一に山の狩人であるマタギのことを話していた<sup>3</sup>。後に泉靖一は、朝鮮に渡って山登りをしたときに出会った焼畑をする火田民に関心を持ったのは、高橋からの影響だと述懐している(泉 1972b: 163)。この農場に来ていた学生の1人であった小島憲(1893-1987)が、1948年秋に博多まで泉靖一を訪ねてきて、明治大学の助教授就任の話を持ってきた(泉 1972b: 304)。泉が、戦後の研究活動を再開することができたのは、父の人脈だった。

泉哲は、国際法や植民地政策について多くの研究を残した著名な国際法学者である。泉哲は主著『植民地統治論』で、植民地が世界の面積の5分の2、人口の3分の1を占め、政治学と公経済の5分の2が植民地に関係した研究であるから、植民学が重要な課題だと位置づけている(泉 1921: 1-2)。泉哲の植民学は、欧米の植民学の研究動向を掌握し、その植民地政策に精通しただけでなく、ローマ帝国やスペインの統治までも言及した上で、日本の植民地政策を批判的に見ていた。日本の植民地政策に対して、他の国々の植民地政策と比較した上で台湾の地方自治制度が羊頭狗肉であるとか(泉 1921: 273)、台湾の同化政策が現地で反抗心を誘発しているとか、内地人の生活を模倣させたことがアイヌ人減少の最大原因であると批判している(泉 1921: 282)。泉哲の植民地研究は、国際関係論から植民学を論じた新渡戸稲造や矢内原忠雄の研究に匹敵し、1927年に京城帝国大学へ赴任したのも、この著作が評価されて国際公法講座の教授として招聘された。浅田喬二は、泉哲の植民地研究を、日本帝国主義の植民地政策である同化主義の批判、植民地本位の文化的統治政策を主張し、

連邦制の結成・植民地独立の究極的容認という特徴を挙げて、彼の主張は戦前として斬新であったと評価している（浅田 1994：185-187、306-313）。

泉哲は、単に植民地本位主義が世界史の潮流に沿った植民政策であるとの信念から理論研究にとどまらず、1921年1月30日に第44回帝国議会へ「台湾議會設置請願書」が提出されて本格化した台湾議會設置請願運動へ積極的に関与した<sup>4</sup>。1923年12月6日に、台湾総督府は治安警察法に基づいてその運動を弾圧し、100名以上を逮捕、拘留した。その中に泉哲が教えた明治大学の卒業生がいたこともあり、泉哲は台湾総督府の弾圧を批判する短文を発表している（浅田 1994：230-232）。また植民地での教育に対しても批判的で、台湾と朝鮮の教育を現地語にすべきであると力説していた（浅田 1994：219、267-268）。さらに満洲事変について、1933年3月27日に日本が国際連盟を脱退するまで、泉哲は日本政府の外交政策と異なる国際連盟擁護論を持っていた（浅田 1994：277）。満洲事変に関する泉の論文が発禁処分になったこともあり、泉哲の演説会に泉靖一が身辺警護をしたこともあった（秋月 1972：280-281）。

泉哲は、京城帝国大学を退職後、アメリカ留学時代の見聞と人脈が注目されて、満鉄の調査部顧問に就任し、1937年4月から5月にかけて中国を視察した。この時、泉哲は64歳で健康が優れなかったため、泉靖一が秘書として付き添い、大連、青島、上海、杭州、南京、蘇州、漢口、長沙、広東、香港、厦門、台湾を1カ月で回った。日中関係が戦争に向かう情勢の中で、泉哲の人脈で中国の要人と意見交換をするための旅行であり、靖一は会談に陪席して話を聞いていたので、国際情勢の分析視点を父から受け継いだ。泉靖一の自伝で、盧溝橋事件前の緊張した状況を体験したことや、各地で中国人や日本人から日本に対する厳しい意見を聞いたことを記している（泉 1972b：232-240、藤本 1994：148-154）。父と息子の信頼関係が、この旅で確立したという証言がある（藤本 1994：148、154）。泉靖一は、この旅行体験が、学者の世界に入ったきっかけとなったと、息子の拓良に語っている。泉靖一の戦争に対する冷静な見方も、この時に培われたものであろう。

### (3) 大学時代の民族誌

泉靖一は、中学時代から登山を始め、朝鮮山岳会に所属したほか、京城帝国大学予科のスキー山岳会、京城帝国大学学友会山岳部の発足にかかわった。自伝では、学生時代をほとんど登山に明け暮れたと回想している（泉 1972b：167-210）。1935年12月から36年1月まで、京城帝国大学山岳部は積雪期の済州島漢拏山に登攀したが、この時に泉の同級生が遭難した。泉は、この事件をきっかけに専攻を人類学に変えようとした。泉の回想によれば、済州島で遭難者を探すために、シャーマンの神託を聞き、「彼らには彼らの論理体系や思考の体系があって、それは私たちの論理や思考とかけ離れたものではないことがはっきりしてきた。彼らの立場にたてば、彼らを理解することは容易である。（中略）前川君が眠っている済州島の人々を、島の人々の立場から描きだしたいと真剣に考えるようになった」と当時の心境を語っている。当時、京城帝国大学では宗教学・社会学研究室的赤松智城（1886-1960）と秋葉隆（1888-1954）

が朝鮮のシャーマニズムの研究をしていたので、その論文を読み、秋葉隆に社会学を専攻したいと願い出た。秋葉は泉にマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』を読むように勧め、泉はその本を読んで社会学教室に入る決心をした（泉 1972b：210-212）。

泉靖一の回想録では、授業で講読した文献を次のように記している。

秋葉隆：ソローキン『最近社会学説』、シロコゴロフ『北方ツングースの社会組織』

赤松智城：オットー『聖なるもの』

このほか上野直昭 (1882-1973) の美術史、藤田亮策 (1892-1960) の考古学などを受講した（泉 1972b：217-218）。泉が文学専攻から社会学専攻へコースを変更したもの、社会学専攻に人類学を専門的に学ぶカリキュラムはなかった。台北帝国大学で馬淵東一は移川子之蔵からアメリカ式の人類学を受けていたのに比べて、泉は基礎理論の教育が不足していたことが分かる。しかし、泉が京城帝国大学で受けた訓練は、唯一の人類学専攻の学生であったということから、秋葉と赤松の調査助手として満洲・蒙古の調査に同行するという実践的なものだった。泉は、1938年に卒業論文で『済州島民族誌』を書いているが、これを書く以前の1936年に、秋葉の斡旋で大興安嶺東南部のオロチョン族を単独調査している。そして1937年8月から9月にかけて、泉は秋葉と赤松に同行し、満洲・蒙古のシャーマニズムを調査している。特に黒龍江流域での赫哲族（現在の名称はホジェン族、当時の名称はゴルジ族）調査は、赤松と泉が連名で出版しているが、実際は泉が調査して執筆したものであった。では次に、この時期に執筆された三つの民族誌の構成を比較してみよう（表1）。

表1 泉靖一の京城帝国大学学部時代の民族誌一覧

大興安嶺オロチョン族踏査報告	赫哲族踏査報告	済州島	
(1) はじめに	(1) 自然環境	1章	自然環境
(2) 住居と食物	(2) 言語	2章	村落の研究
(3) 狩猟および家畜	(3) 漁労と狩猟	3章	家族の研究
(4) 分業および交易	(4) 氏族と集団内の血族関係	4章	超家族集団の研究
(5) 氏族と家族	(5) 家族	5章	済州島の宗教
(6) 部落および行政組織	(6) 出生・疾病・死亡および性	6章	済州島民具解説
(7) 結婚と女性	生活に関する習俗		
(8) 疾病と死	(7) 年中行事		
(9) 天文と神統			

赫哲族の調査は赤松と共同だが、そのほかは泉の単独調査である。オロチョン族と赫哲族の民族誌は、調査して直ちに発表されたが、『済州島』は戦後に出版された。オロチョン族については、秋葉の授業でシロコゴロフの『北方ツングースの社会組織』を調査前に読んでおり、また秋葉が集めたオロチョン族の調査データを見せてもらっていた。泉は約1カ月近くの調査を終えて帰ると、秋葉から報告書の目次を書いた一枚の原稿用紙を渡され、その目次に沿って原稿用紙100枚余りの報告書を執筆し、写真を添えて提出した。ちょうどその時、多島海の調査を終えて京城に来ていた渋沢敬三 (1896-1963) が秋葉の研究室を訪れたので、秋葉が



渋谷にその原稿を見せ、その場で全文を『民族学研究』に掲載することが決まったのだという（泉 1972b：229-230）。泉のオロチョン族調査は、最初のフィールドワークであったこともあり、その報告書は試行錯誤で執筆した習作であった。泉は、それまで山登りに熱中して学業をおろそかにする怠惰な学生と評価されていたのが、報告書の全文が内地の学術雑誌に掲載されたので、大学での泉に対する評価は高くなった。

泉のオロチョン族の民族誌は、短期間で、かつ初めての調査にしてはよくできた報告書である。当時のオロチョン族は国境に居住する民族として、軍事戦略的に極めて微妙な立場であった。泉の報告でも、軍事と人類学の関係を考える上で深刻な影を落としている。泉がオロチョン族を調査したのは、オロチョン族の宣撫工作を専門にしている特務機関員で、オロチョン族の軍事顧問をしていた吉岡義人から秋葉にオロチョン族を調査するよう要請があったためである。秋葉は泉を推薦し、泉は京城帝国大学の満蒙文化研究会から若干の資金供与を受け、通訳や調査地は、すべて吉岡が手配して調査した（泉 1972b：218-219）。泉の自伝からは、彼自身は軍隊嫌いであったことが読み取れる。また彼のオロチョン族民族誌が学問的な業績であることを否定するわけではない。しかし泉の調査にアヘン使用の項目が入っていることは、結果的に調査結果が宣撫工作の一端を担っていたことを示している<sup>5</sup>。具体的には、泉の世帯調査一覧表に幕居名・氏・性・年齢・家族と並んで、アヘン使用の項目が入っている（泉 1972a：8-13）。これによると調査地のオロチョン族が175人いて、その中で14歳以上は121人いた。そして世帯調査で明らかになったアヘン使用者は55人で、14歳以上の半数近くにのぼることが明らかになっている。

さらに、泉靖一は、オロチョン族調査の手土産として特務機関からアヘンを斡旋してもらい、オロチョン族に手渡している（泉 1937：44）。泉が最初に発表した論文では、アヘン配布を書いているのに、戦後にオロチョン族の報告を再録して出版した本で、その部分を削除している（泉 1969：56）。また初出の論文では、オロチョン族のアヘン服用に関して、軍事顧問の吉岡義人のパンフレットに記述された服用の歴史、入手過程、方法、量等の調査は注目に値すると書いているが（泉 1937：60）、戦後の本では、その部分が書き改められ、「彼ら（＝オロチョン族）の言によると」と出典を伏せている（泉 1969：63）。著作集には、初出原稿を削除した戦後の版本を収録している（泉 1972b：15、21）。最初の原稿は、発表されることを意識せずに、調査地で見えたままを記述し、それが渋谷敬三の目に触れて、一切手を加えず「全文」を掲載すると判断されたため、アヘンの記事も、そのまま印刷されてしまった。しかし、戦後に発表した原稿で、調査地にアヘンを土産として配布した部分と、特務機関のパンフレットについての言及を削除したことは、泉自身、オロチョン調査でアヘン配布、及び特務機関からの調査協力を得たことに対して忸怩たる思いを秘めていたのであろう<sup>6</sup>。

これに対してゴルジ族の調査では、表面的な記述で終わっている。この報告では、先行研究として凌純声（凌 1936）とラティモア（Lattimore 1933）の民族誌があり、この二つを参考にした。この報告書は、項目ごとに調査データを整理する手法がとられている。これも実際の調査が約1週間と短く、限られた時間で仕上げた報告書で、上述の二つの民族誌を再

確認して記述をしているに過ぎない。従来の項目ごとにまとめる方法を取らず、社会の内的連関から人々の生活を生き生きと描き出すマリノフスキーの民族誌の影響は、この短期の調査では現れず、卒業論文として取り組んだ済州島の調査で顕著になっている。

泉の『済州島』は、当初渋沢敬三が主宰したアチック・ミュージアムの叢書として出版する予定だった。しかし、終戦後の混乱で公表する機会を失い、1966年になって東洋文化研究所から出版された。この公表されたものは、基本的に卒業論文を若干手直したものであり、あまり大きな加筆はないようである。この報告書で特徴的なのは、第4章の超家族集団の研究である。他の報告書では、氏族という項目で、明確に出自集団についての記述をしているが、この報告書では、あえて「超」家族集団として、氏族以外で共同労働である「ゆい」や頼母子講である「契」、また脱穀用の碾磨小屋を維持する集団、用水を管理するための集団を分析している。泉が冬山登山で仲間を失って以来、済州島は何度も訪れていたのも、オロチョン族やゴルジ族の短期調査とは異なり、現地の住民との交流が随所に見られる。泉はこの本で、父系親族集団について概説的な説明にとどまる反面、脱穀などで使用する碾き臼を共同で使用する「碾磨集団」が姻戚関係により作られていることを詳細に記述している。泉は民族誌を従来の人類学の型にはまった調査項目にとらわれておらず、生活実感から社会を描くマリノフスキーの方法を模索したことが窺われる。

## 2. 学術探検隊の組織者

### (1) 京城帝国大学蒙疆学術探検隊

1938年夏に実施された京城帝国大学蒙疆学術探検隊の組織化は、泉靖一が創設にかかわった山岳部の活動の延長線上にある。泉靖一が所属していた山岳部は、1934年から35年にかけて京都帝国大学学士山岳会の白頭山冬季登攀に刺激され、1936年3月に済州島、さらに中国大陆の山に登攀する計画を立てた。1937年秋に実現可能な山として小五台山、さらに大同から南下して五台山に登り、あわせて山岳地帯の調査を立案した。山岳部の顧問をしていた尾高朝雄(1899-1956)は、資金を工面した上、この探検を大学の大陸文化研究会の事業に組み入れ、多くの教員を探検に参加させた。

泉は、1938年に大学を卒業し、助手に採用された。1938年3月に泉は張家口へ行き、駐屯部隊と察南自治政府の旅行許可と探検行程を協議し、五台山登攀を取りやめ、その代わり内蒙古踏査と小五台山に登攀するのが妥当と結論づけて、この学術探検を実施した(藤原 1974: 317-318)。探検隊は、本部、登山班、学術調査班(経済学班、動物班、植物学班、地理学班、地質学班)、医療班、撮影報道班<sup>7</sup>で構成された(鈴木 1941)。学術探検隊は、1938年7月25日に張家口を出発し、9月10日京城に到着している。この学術探検の成果は、京城で大陸文化研究会の報告後援会、報告展覧会、さらには探検隊が撮影した映画「蒙疆瞥見」を上映し、最終報告書の『蒙疆の自然と文化』を出版した(京城帝国大学大陸文化研究会編 1939)。

泉靖一は、この報告書に「内蒙古紀行」「小五台山登攀記」「内蒙古の民俗」を執筆してい

る。現地での調査時間が短かったことに加え、調査が終わって2カ月半後の1938年12月に、旭川第7師団へ入隊せねばならなかった。泉は行動日誌的な報告書以外の「内蒙古の民俗」は、途中までしか書けなかった<sup>8</sup>。さらに、この報告書を著作集に収録した編集者の原ひろ子(1934)は、軍の監督下で行動していた学術探検隊なので、記載事項に制限が加えられたと解説している(原 1972: 379)。

この学術探検は短期間であったが、文系と理系の共同調査が成功したので、京城帝国大学では以降の学術探検において組織のモデルになった。特に注目したいのは、地下資源に関する報告である。地質学班長であった波多江信広(1901-1980)は、鉱物資源を有しながら発見されない理由について、地質学的原因も挙げているが、遊牧民が地下資源に執着しないことや、宗教上の理由で土地の掘削を嫌うなど、文科系の側面からも分析している(京城帝国大学大陸文化研究会編 1939: 139)。この文科系的な視点は、探検隊員の構成から見て、泉の考察ではないかと思われる。多様な専門の隊員が参加した探検隊調査であったゆえに、多面的な分析を可能としたのである。

この調査が、京城で非常に大きな反響を呼び、1939年にも学生有志で北支蒙疆研究会を作り、小規模な調査隊を派遣した(京城帝国大学大陸文化研究会 1940a: 1-2)。京城帝国大学の蒙疆学術探検が朝鮮で特に反響を呼んだのは、1938年に擁立した傀儡政権の蒙疆政府に朝鮮総督府が出張所を設けたり、実務官僚が朝鮮総督府から蒙疆政府へ出向したりするなど、朝鮮総督府や朝鮮の企業が、蒙疆開発やその利権へ積極的に関与した背景があったからだ。1938年の学術探検隊が報告した蒙疆の政治と経済に関しては、蒙疆政権の政治ブロックの独自性や、経済開発について報告しているのに対して(鈴木 1939: 223 - 248)、1939年の法文班の報告では、西北貿易と回教徒が中心的な調査課題にされた(池田 1940、清田 1940)。

## (2) 西ニューギニア資源調査団

1938年12月兵役についた泉は、1941年12月、太平洋戦争が勃発した時期に満期除隊となり、京城帝国大学理工学部の助手に復職した。泉が京城帝国大学での最初の活動は、太平洋協会の要請による1943年1月から9月までの4西ニューギニア資源調査団への参加である。彼は尾高朝雄に海外へ行くことを相談して、太平洋協会へ打診をしてもらった。その結果、陸軍司政官としてボルネオの原住民調査の依頼が来た。しかし、泉は陸軍司政官という身分に躊躇して、この仕事を断った<sup>9</sup>。その後、1942年の秋に、再び太平洋協会から連絡が入り、西ニューギニアの資源調査隊として人類学調査の仕事を打診してきた。そこで泉は、未開社会に接する得がたい機会として参加することにした(泉 1972b: 261-262)。次に、泉が参加した西ニューギニア資源調査隊の調査についてまとめてみよう(表2)。

西ニューギニア探検隊は、純然たる学術調査ではなく、戦争遂行のための資源調査が目的であった。この調査計画は、日本軍がもっとも占領地を拡大した時期に立案されたもので、総力戦研究所の構想に基づいて、海軍が西ニューギニアに基地を設け、長期戦に備える計画



を立案したのであった(鳴谷 1953:102-103)。この調査団に合わせて300人もの設営隊が同じ時期に現地へ入った。彼らの主目的は農場を開くことであった(泉 1972b:264)。農業資源開発は、農業適地の調査に加えて、日本から種子を持参し、現地の気候に適する作物を調べる事が重要な課題であった。この農作物は、南京豆や陸稻、サツマイモなどの主食以外に、綿作の適地も調べていたが、このほかに林業や鉱産物調査もおこなわれた。特に鉱業はホルナ炭田が有望視された(鳴谷 1953:29-38)<sup>10</sup>。表2の組織中、第5班で南洋興発が入っているのは、彼らが綿作の試作で実績があったからである。

表2 西ニューギニア資源調査隊の組織

班	主体	氏名	当時の所属	担当
1	東北帝国大学	田山利三郎 八木健三 大平辰秋 小林宏	東北帝国大学 同上 南洋庁熱研 京城帝国大学	班長・地質 鉱物 地理 医療
2	法人資源科学研究所	津山尚 野田光雄 石橋正夫 松山三樹男 田中正四	資源研 満洲国立博物館 資源研 岐阜高農 京城帝国大学	班長・植物 地質 鉱物 農業 医療
3	国立科学博物館	佐竹義輔 井尻正二 杉山隆二 長戸一雄 服部敏	科学博物館 同上 同上 農業教育専門学校 京城帝国大学	班長・植物 地質 鉱物 農業 医療
4	京都帝国大学	小島信夫 梅垣嘉次 三木茂 梶尾茂 森本勇	京都帝国大学 同上 同上 同上 宇都宮高農	班長・地質 鉱物 植物 林業 農業
5	朝鮮総督府	波多江信広 長沢徹 鈴木誠 飯山達雄	朝鮮総督府地質調査所 小川香料KK 京城帝国大学 京城帝朝鮮鉄道局	班長・地質・鉱物 林業 医療 写真
6	南洋興発KK	兼松四郎 大西弘 出口宣三 湯本義香	南洋興発KK 東北帝国大学 南洋興発KK 台北帝国大学	班長・鉱物 地質 林業 医療

出典：波多江信広『西イリアンの思い出』東京：川島書店、1968年、vi-vii。

この組織表で気がつくのは、調査団の正式メンバーとして泉が入っていないことである。波多江信広は、泉が蒙疆学術探検隊で、運営に非凡な才能を発揮した手腕を買われ、西ニューギニア資源調査団の総務を担当したとしている。つまり、研究者ではなく、組織運営担当者

として泉が参加したのである。泉と共著で『西ニューギニアの民族』を執筆した鈴木信は、第5班の医療に入っている。この調査団の特徴は、京城帝国大学や朝鮮総督府など、朝鮮関係の組織から7名も参加していることである。このうち、泉・服部・飯山は1938年の蒙疆學術探検隊のメンバーであり、京城帝国大学の人脈が、西ニューギニア探検隊の構成に重要な役割を果たしていた（波多江 1968：vii）。朝鮮関係の人員で構成されていた第5班は、ホルナ炭田の開発を担当した。海岸のマウクワリから炭田調査をする山頂まで、食料・テント・宣撫品など16トンあまりの物資を搬送するため、極地探検で用いられた「極地法」と呼ばれる輸送手法が応用された。これは、かつて朝鮮総督府が永年前人未踏だった北朝鮮の山々を踏査した際に、総督府の技官たちが採用した方法であった（飯山 1970：12）。

この調査団は、海軍が西ニューギニア戦線で必要な需要地質鉱産、林産、農産資源の開発とその基礎資料の蒐集をしようとしたが、戦況が悪化して山岳地帯の軍用道路測量や飛行場適地の調査に終始し、結果として竜頭蛇尾に終わってしまった（佐竹 1963：1、3）。ニューギニア調査隊の組織は、本部と調査隊からなり、調査隊はさらに設営隊と資源調査隊とに分かれ、総勢416名であった（飯山 1970：7）。

泉が、西ニューギニア調査で書いたのは、「ニューギニアの木偶」「サゴ椰子が生み出す文化」「西部ニューギニア原住民の社会組織」の論文と、鈴木信と共著で書いた『西ニューギニアの民族』である。このほか、調査団の報告書を書いている。これらの報告書と論文が書かれる基礎は、泉自身がおこなったヤムール地峡とスハウテン諸島の調査であった。

泉のヤムール地峡調査は、第3班に配属されておこなわれた。海軍からの要請で、地形調査の方針が決まり、本部は泉をヤムール湖まで先発隊として出発させ、連絡軍用道路造成のための測量と、飛行場適地の探索任務が与えられた（佐竹 1963：83-85）。そこで、泉が現地でヤムール地峡横断に同行させる人夫を募集するため、ヘーフェインク湾の東にあるナパンという集落へ行った<sup>11</sup>。泉はこの人夫を探す仕事を通じて、地元の民族関係に関する調査をした。泉は報告書の第3節に「労働者として動員しうる人口算定の基礎」とする項目を挙げ、集落の人口構成と16歳から35歳の動員できる割合と生活維持できる人口を算出し、女性は6%、男性は10%が動員可能と、具体的な試算を提言している（泉・中山 1944：8-9）。『西ニューギニアの民族』でも、「3、人口と労働力」で、西ニューギニアの人口構成と動員できる労働者の数値を示している（泉・鈴木 1944：21-31）。現地労働力の確保は、調査探検だけでなく、その後の地下資源開発、農場開拓においても重要なので、軍事的に必要な情報であった。

泉はアンガディ島調査で、サゴ椰子の澱粉作りに関する詳細な民族誌を作成している（泉・鈴木 1944：38-40、泉 1972c：152-173）。これは動員した人夫の食事を調達するための知識であり、また本国から持ち込んだ食料に限りがあるため、日本人も現地の食糧確保で、地元の食料とその加工法があるかを調べる必要があったからである。『西ニューギニアの民族』の構成は、前書き、体質、人口と労働力、経済生活、社会の組織と機能、宗教生活であるが、経済生活の食料の部分がもっとも詳細に記述されているのは、泉のニューギニア調査で、食糧確保の重要性が反映されている。

泉は集落の社会組織についても論じているが、これは現地で使用した人夫たちから、マレー語で聞き取りをしたり、現地で入手したオランダ人官吏の報告書などを見たりして記述したとしている<sup>12</sup>。第3班の班長であった佐竹義輔(1902-2000)は、形質人類学の資料にするため雇用していた現地民の人夫を、集落ごとにわけて写真を撮影した。また泉は民族分布図作成した。泉は、彼らの賃金支払いなどの事務も担当していた(佐竹 1963: 282-287)。

泉のもうひとつの調査地であるスハウテン諸島は、より軍事的な理由で調査された。泉は自伝の中で「第二次世界大戦がはじまり、オランダの勢力が日本軍によって排除されるとともに、新宗教がおこり、その教祖を中心に反乱が続いた。私たちは、このような現象に興味を持ち、調査をすることにした」と、学術的な関心からの調査であったと述べている(泉 1972b: 281)。反乱のおきそうな場所に人類学者が単独で入っていけば、トラブルを招いて反乱が拡大するといっているので、同期の京城帝国大学の医者である服部敏、鈴木誠(1914 - 1973)、田中正四、小林宏の医療班を主体に波多江信広(班長)と飯山達夫(1904-1993、写真)、岡野、伊藤の助手、さらに読売新聞の報道班、沢寿次など総勢10名の朝鮮派遣組が主体となって調査をおこなった(泉 1972b: 281-282、飯山 1970: 92、波多江 1968: 184)<sup>13</sup>。このメンバーのうち、4人が回想録を残しているので、この調査の背景は明確である<sup>14</sup>。

この調査目的について率直に書いているのは、波多江信広である。それによると、太平洋戦争が始まる頃、ピアック島でオランダ政府の圧制に抵抗してパプア王国独立運動が勃発した。その頃、アガニータという老婆が神のお告げを聞いたとして、住民に神を信じよ、一切働くことをやめて毎日踊っていれば、天から飛行機や軍艦、食糧がふってきて、パプアの独立王国が生まれるとふれ回った。住民は教祖アガニータの言葉を信じ、飲めば神のご利益があるという水を入れた小瓶を腰に下げ、毎日踊り暮らしていた。この混乱時に、島では複数のボスが群雄割拠していた。波多江は日本軍がこの島へ上陸したとき、平和工作のためという理由でアガニータを処刑したらしいと記している。島民にアガニータの処刑を知らせなかったのも、日本軍が宣撫工作をするたびに、現地では必ず交換条件としてアガニータを返せと要求していた。海軍の宣撫工作は効果が無く、作戦計画のため島に來た陸軍中尉が原住民に狙撃される事件も起きて、武力鎮圧を図ったが徒勞に終わった。そこで平和裏に宣撫工作を進めるため、医療班中心の調査団が組織されて、この島に向かったのであった(波多江 1968: 182-184)。

スハウテン諸島はスピオリ島とピアック島からなり、当時の人口は25,000人と、西ニューギニアで最も人口密度が高かった。島内での食糧自給は不可能であったので、この地域で交易、鍛冶、造船、航海術が発達した。泉が海軍に提出した報告書の6章「宗教」は、副題が「スハウテン諸島騒乱の分析」で、宗教反乱のプロセス、日本軍の宣撫工作、反乱の背景にある信仰形態、反乱の指導原理の分析とその対策が報告されている。

泉の自伝では、この島に派遣された医療班の治療が効果をあげたので、調査団は地元の人々に溶け込んだと書いてある(泉 1972b: 284)。しかし海軍の報告書では、反乱をおこしたアガニータを、日本軍が処刑したことを明瞭に書いている。また民政府の進駐後に宣撫工作を

始め、泉は反乱を起こした思想的指導者を調査で突き止めて、その対策を進言したことなど、軍事的な宣撫工作への提言が書かれている。そしてアガニータの説く教えの要点を次のようにまとめている。

- (1) パプアのマンセルナンギへの信仰を篤くせよ。
- (2) 信仰を篤くすれば食物が天から与えられ、大漁になる。
- (3) インドネシア、「支那人」、そして日本人を駆逐せよ
- (4) 神水を身につけると不死身に成り、弾丸が当たっても刀で切られても死なない。
- (5) マンセルナンギを説くアガニータはパプア王国の預言者である。
- (6) その他パプア王国が来るとか、海がなくなる、岩の穴から軍艦が現れる、木の葉で作った飛行機が飛び出すなど。

こうした宗教的言説は、日本軍が侵攻する前のオランダが統治した時代に、現地の宗教を弾圧した過程で変貌を遂げ、オランダ勢力が全面的に撤退したあと、これらの言説が体系づけられて宗教となったと結論付けている。そして社会的基礎条件および宗教的必然性によって生じた騒乱は、一朝一夕には終息しないので、その対策を提言している。食料不足が預言者の不信を増大しているので、反乱を指導した勢力を失墜させるためには、(a) 預言者の指導者の切り崩し、(b) 切り崩し後におこる混乱時に、日本の温情と威力を宣伝しつつ、若干の物資的宣撫をおこなう、(c) すみやかに「人口疎散」をおこなう。これは軍事用語で、人口の分散を意味する。泉は、この報告書で次の2点を提言している。家族単位でサゴ椰子を多く産出する地方や、家族労働力を必要とする農場へ分村させること。および食料としてのサゴ椰子の重要性を理解し、かつ農場の開拓という政策の必要性を理解させて島の住民を移住させること（泉・中山 1944：29-34）。泉が海軍に提出した報告書では、いかに人類学的知識を応用して戦争遂行のための作戦を立て、現地住民への宣伝や労務者募集に役立てるかを強調している。泉の自伝や論文からは、こうした戦略的提言を読み取ることはできない。

泉は、ニューギニアから1943年8月にパラオ経由で帰国した。京城に帰った泉は、市の商工会議所でニューギニアの講演を依頼され、戦局の悪化や敗戦を予告した話をして、聴衆に大きな衝撃を与えた（泉 1972b：288-289）。泉は戦争に対して、父から受け継いだ冷静に国際関係を分析する知見に加え、ニューギニアの最前線で、アメリカのニュース放送を聞いて日本軍の劣勢な戦況を肌身で感じていたので、戦争の行方にある程度独自の見識を持つことができたのであろう<sup>15</sup>。

### (3) 大陸資源科学研究所

大陸資源科学研究所に関する記録は、泉靖一の回想録が主要である。その点、傍証資料が少ないので、この研究所の実態を分析するうえで制約が多い。しかし、この研究所で泉が活動した調査は、京城帝国大学での最後の仕事となるので、ここで言及しておきたい。



1943年に、京城帝国大学理学部長であった山家信次(1887-1954)が大学総長に就任した。当時、泉は理工学部の助手をしていた。泉は理工学部と文学部の研究費格差が大きいことに憤りを感じており、山家総長を批判していた。山家総長から京城帝国大学の活動について率直な意見を聞きたいと呼び出しがあったので、泉は「アジアの自然と文化を総合的に調査研究する機関を大学に付置すべきである」と述べた。この構想に、医学部の今村豊と理工学部の安宅勝(1902-?)が賛成し、1944年に研究費を計上して、第三次蒙疆地帯学術調査隊が派遣されることになった(泉 1972b: 292-293)。

この調査隊は、1944年7月30日に京城を出発し、北京・張家口・大同・厚和(現在のフフホト)・包頭を1カ月でトラックを走破させて調査を実施した(岩瀬 1944: 2)。この遠征は、資源探査や医学調査が中心であったが、同時に人文系の調査も行っていた。この調査隊の報告書は『京城帝国大学第三次蒙疆学術調査隊報告』(1944年)として謄写版で印刷された。泉は、当時何を書いても軍事機密に触れてしまうので、「私たちはこっそりとガリ版で報告書をしたため、表紙に(秘)という印をぺたんと押して、仲間だけに配った」と述べている(泉 1972b: 293)。この報告書の号数・著者・表題は、以下の通りである<sup>16</sup>。

- 1号 泉靖一・坂本和英・徳永信三『北方遊牧狩猟民族の人口』43頁
- 2号 岩瀬栄一『蒙疆に於ける稀元素鉱物と其の産地』10頁
- 3号 小林宏志・獅子目慶三・飛永大和『蒙疆包頭に於ける漢人及蒙古人兒童のツベルクリン反応検査成績』16頁
- 4号 小林宏志『満蒙人(蒙古族・通古斯族)指紋の研究(第6報)』『蒙古族(伊克昭盟)の指紋に就て』25頁
- 5号 小林宏志『第6回満蒙人(蒙古族・通古斯族)血液型調査: 内蒙古蒙古族の血液型に就て』14頁
- 6号 田崎亀夫『蒙古人の梅毒蔓延状況に就て』7頁
- 7号 天野和武・高本弘『蒙古人の智的素質』37頁
- 8号 永井莊七郎『黄河筋包頭に於ける流泥及び水質』19頁

この調査は、前の第1次と第2次との連続性<sup>17</sup>で「第3次」と命名されたが、新しい研究所を設置するための実績作りで、急遽組織された。だから、それまでの第1次と第2次の調査遠征とは、連続性があったようには思えない。しかし、京城帝国大学の中國大陸での資源調査の実績が認められ、1945年4月14日に官制が制定された。

1945年4月14日に内務省より京城帝国大学に大陸資源科学研究所を付設する勅令案が閣議へ提出され、同年6月2日に裁可、6月4日に公布された<sup>18</sup>。終戦直前に駆け込みで設立され、「朝鮮、満洲国、中華民国等大陸地域ニ於ケル各種資源ノ探究開発ノ為」と朝鮮半島から中國大陸にかけての資源調査を目指す目的を掲げていた。その設置が緊急である理由として、「戦局ノ推移ニ依リ南方資源ノ戦力化著シク困難ト為リタルニ伴ヒ大陸諸地域ニ於ケル各

種天然資源ノ急速ナル戦力化ハ本土防衛体制確立」など、ニューギニア、東南アジアでの戦局悪化から資源確保ができないので、北方の資源探査を緊急におこなう必要があると書かれている<sup>19</sup>。

『大陸資源科学研究所要覧』は1945年に出版されている<sup>20</sup>。今村豊所長が書いた設立趣旨によると、「研究対象が大陸の人的物的資源である以上研究の大部分が現地調査に占められ」とあり、研究所は既存の機関や学部の実験室を使い、特別の建築物はなかった<sup>21</sup>。またこの組織は21名の嘱託、6名の調査部室、7名の事務室で構成されていた。研究計画全体としての主要テーマが、朝鮮と大陸の鉱物資源であった。1945年度の研究計画では、第一部と第二部が理工学部の研究分野であるが、第三部は形質人類学、医学、人文科学の研究テーマを含んでいた<sup>22</sup>。

当該研究所の書記として勤務していた上床一男は、泉が今村所長の片腕として企画実践を猛烈に推進したと回想している。事務部門には、統計室に13人女性がタイガー計算機を稼働させていた述懐している（京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編 1974：70-71）。研究所は、半数が理工系の研究者であったため、このような統計室が配置されたのであろう。上記の『要覧』に書いてある調査部室6名はすべて女性であり、正規の職員以外に調査部室で職員がいたことが分かる。

泉は、1945年春に総長に随行して東京へ行き、研究所の官制公布の細部にわたる交渉をした。7月には研究所から蒙古へ調査隊を派遣した。泉は、医学部の学生をつれて鉱山地帯の漢人人口を調べ、北京に帰って近郊の農村を調査したと記している（泉 1972b：294）。この時は、6月中旬から張家口に基地を設営し、調査団を3つの班に分けて派遣した。調査団の本部は蒙疆政府の官吏会館を借り切り、研究所の事務官は生活物資や調査に必要な資材、また車両の調達、蒙疆政府との交渉や軍部との連絡で忙殺され、調査隊の資材物資を積み込んだ数台のトラックが砂漠地帯に出発したと回想している（京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編 1974：71）。

この時、泉は張家口にあった西北研究所へ挨拶に行っている。西北研究所の今西錦司所長は、大陸資源科学研究所の調査団がトラックで出発するのを見て「われわれだって自由にトラックが使えるなら、もっとしっかりした仕事もできるものだ。それに現地の人間になって仕事をしようとしているものを踏みつけて、よそからきた人間ばかりちやほやするなんて、どう考えてみても腑に落ちぬ」と不満を漏らしている（梅棹 1971：337）。この京城帝国大学の蒙疆調査は、朝鮮の産業界に対して満洲、蒙疆へ進出を促進する朝鮮総督府の政策から支持されて実施されており、京城帝国大学も、大陸での資源探査で大学の特色を打ち出す意図であったことから、蒙疆政府から手厚い支援を受けたのは当然である。西北研究所の研究者は、京都帝国大学から派遣されてきた意識が強かったが、京城帝国大学は、朝鮮総督府の後援という実利的な背景をもっていたため、蒙疆政府の扱いが特別であった。

泉の自伝では、鉱山地帯の漢人の人口を調査した場所特定はできない。この時記入された世帯調査票が残されていて<sup>23</sup>、調査地が張家口と北京の間にある宣化という炭鉱地帯であっ

たことが分かっている。世帯調査では、炭鉱労働者の出身地、家族構成などを詳細に調べており、大陸資源科学研究所の研究テーマである漢族の労働資源に関する基礎調査であったことが分かる。

敗戦直前に、泉はこれとは別に、北京近郊で調査を実施したというが、泉の自伝では、場所が特定されていない。泉は、1945年の春到北京の大使館で日本軍の勢力圏外の北京近郊で生活改善運動をおこなっている若者を紹介され、彼らの案内で7月の終わりに2週間ほど調査をした。彼らは、日本の憲兵さえ大丈夫なら延安まで行けると言っていた（泉 1972b: 294-295）。延安は中国共産党の本拠地である。敗戦前後到北京近郊の八路軍解放区があったのは温泉村一帯である。泉と同様に、北京近郊の八路軍解放区の温泉村一帯に行ったことのある日本人がいた。敗戦当時、華北総合調査研究所で勤務していた斉藤昌子は、「世界の新しい動き」を見たいと希望して温泉村の解放区に入り、そこから花有園、張家口へと移動し、全日本無産者芸術連盟がある涿鹿県にたどり着いたという（山崎 2003: 294-296）。泉が調査した地域は、日本軍の統治が及ばない北京郊外の地域なので、斉藤昌子が逗留した温泉村の解放区ではないかと推測できる。

泉が漢族研究に関心を持ったのは、大陸資源科学研究所で計画されていた研究テーマにあるからである。泉が秋葉とともに分担していたテーマは「満洲に於ける移住漢人の社会構造」なので、満洲や蒙古の少数民族を研究していた泉にとって、漢民族の調査は新しい分野であった。泉自身も次のように述懐している（泉 1972b: 294）。

漢人の文化にアプローチをすることをさけて、私はその周辺の調査ばかりをおこなってきた。私は漢人と漢文化に肉迫したかったが、それはあまりに大きく、あまりにも奥深いので、はじめは外側から攻めようと考えていたからであった。（中略）この夏、ふとしたことから中国人の農村に入る機会があたえられたので、最後の調査になるかもしれないが、北京の近郊の農村にとびこんでしまったのである。

泉はニューギニアから帰った時、すでに敗戦を予感していた。しかし1945年夏の段階で、研究所の創設と調査隊の組織で忙殺されていたので、敗戦時期を予測できなかったのであろう。しかし、1945年8月8日にソ連国軍南下のニュースを聞いて、泉は直ちに蒙疆に派遣していた調査団を撤収させており、組織運営で優れた手腕は最後まで生かされた。大陸資源科学研究所は、設置からわずか4カ月で消滅したので、この時の調査は、戦後も発表されることはなかった。しかし、公的な研究所の開設と運営をした泉の経験は、戦後に受け継がれていくのである。

#### (4) 戦後の展開

戦後、泉は日本国内の調査、南米の調査団の組織者として強力なリーダーシップを発揮し、日本の人類学をリードした。その手腕は京城帝国大学時代からの経験によって培われたもの

だった。京城帝国大学蒙疆学術探検調査は文理一体型の調査隊であったことから、これの人脈が、戦後に、形質人類学も含めた「京城人類学派」と呼ばれるグループの基礎になっている。

組織者として手腕を振るった泉靖一は、京城帝国大学の人脈を使いながら、人類学とは異なる活動もおこなっている。それは、終戦直後の引揚者救援組織である。当時一緒に仕事をしていた田中正四は、戦後、泉が南米の考古学に打ち込んだ理由を「引き揚げと関係あるかもしれない」ともらしている（上坪 1979：29）。調査地の喪失とともに、そこでの壮絶な体験が、泉の転換期となっていると考えられる。

1945年8月15日の敗戦後、京城では日本人を保護し、引き揚げ事務をおこなう「京城内地人世話会」が組織された。泉は、世話人会から9月中旬に難民化する引揚者への診療と衛生管理の組織を依頼され、京城帝国大学の医学部人脈で罹災民救済病院を発足させた（藤本1994：201-202）。泉は同年12月18日に博多へ引き揚げたが、京城の病院を博多に移転して継続させるため、外務省の外郭団体の在外同胞救護会と交渉して「在外同胞救護会救療部」へと再組織した。その病院の部長に今村豊、庶務課長に田中、会計課長に泉が就任した。救済本部は博多の聖福寺におかれ、救護施設だけでなく引き揚げ孤児を収容する聖福寮もおかれた<sup>24</sup>。その医療部で医者をしていた山本良健は「泉君の作ったなかで、一番傑作な組織がこの医療部」と言っている（上坪 1979：29）。

京城帝国大学が、1938年に蒙疆学術探検隊を組織して以来、泉は医学部解剖学教室にいた今村に限らず、医学部に幅広い人脈を持っていた。朝鮮・満洲からの引き揚げ者を受け入れる組織も、京城帝国大学の人脈で作られ、泉はその組織運営のために働いていた。当時の活動取材してドキュメンタリー番組を制作した上坪隆（1935-1997）は、関係者からの聞き取りにより、当時の泉靖一の活動をつぶさに記録している。泉は、引き揚げ者を収容する建物を確保し（上坪 1979：27）、引揚業務を円滑に進める連絡のためソウルまで密航している（泉1972b：302）<sup>25</sup>。さらにこの組織では、博多近郊に二日市保養所を作り、中国大陆から日本まで引き上げる途中にソ連兵や現地民にレイプされて妊娠した女性に堕胎手術を施していた。日本では、1948年に優生保護法が立法されて、経済的理由による中絶を認めるようになったが、それ以前にこの保養所は作られ、堕胎罪として違法となる堕胎手術を組織的かつ計画的に施していた<sup>26</sup>。当時、泉は、政府に働きかけて、二日市保養所だけ特例を設けるように運動したが、閣議で否決されてしまった。当時の政府は、こうした事態に対処する法律がなかったので、皇族の威光を借りて事態を打開しようとし、高松宮殿下に保養所の視察を依頼し、病院関係者にねぎらいの言葉をかけてもらったので、警察から犯罪に問われることなく堕胎を続けられたのであった（上坪 1979：187）。泉が、どのような人脈で政府に働きかけたのか分らない。また皇族に視察してもらう手配を泉がとったのかどうかも確認出来ない。しかし、彼が手がけた博多の引き揚げ者の救護施設の運営は、京城帝国大学で修練した手腕を日本社会で生かす最初の試練となった。

泉は、「外地引揚の御婦人方に告ぐ」という文案を作り、『西日本新聞』1946年7月17日に広告記事を出した（上坪 1979：181-183）。朝鮮の登山会や京城帝国大学の蒙疆、ニュー



ギニアの探検隊で同行した飯山達夫は、朝鮮から博多に引き揚げたとき、町で偶然泉靖一と再会した。飯山は、泉に連れられ二日市保養所を訪れ、堕胎手術の現場を写真に残している(上坪 1979:168)。1948年、泉は明治大学へ就職し、人類学者として戦後の研究を再開した。しかし、東京の在外同胞援護会、西日本各地の救療部の仕事で働いていた時期に、泉はライフワークとして聖福子供寮の仕事に尽くそうと思っていたと、当時の友人は語っている(上坪 1979:108)。1952年に聖福子供寮はいづみ保育園となり、1965年に閉鎖された。保育園の名前には、泉にちなんで命名されたという(上坪 1979:112)<sup>27</sup>。

現在でも、優生保護法に関連して、医療界では泉の名前が語られるという。泉靖一の卓越した組織力は、戦前の探検調査を実施する過程で修練され、ニューギニア調査では政府や軍関係者との付き合い方を学び、終戦後は、在外同胞援護会の組織や活動をめぐる政府機関やGHQとの交渉において、目を見張る働きをした。泉靖一の研究経歴を見ると、終戦をはさんで明らかに大きく転換している。その要因は、終戦による中国大陆や朝鮮半島の調査フィールドを喪失したことに加え、博多の在外同胞救護会救療部での経験が大きいのではないだろうか。戦後、泉は学会や南米の調査プロジェクトの組織者として重要な役割を果たしたが、彼の博多での体験が重要な転換点になっていると思う<sup>28</sup>。

### 3. おわりに：馬淵東一と泉靖一の比較

最後に、泉靖一の京城帝国大学の経験の特徴を明確にするために、泉と同様に、1930年前後に植民地帝国大学で人類学の専門教育を受け、そこでフィールドワークの経験をつんだ人類学者に馬淵東一と対比させたい。馬淵は台湾の山岳地帯で台湾原住民を調査したのだが、泉は朝鮮にとどまらず、内蒙古や満洲へ出かけている。台湾は1920年代から30年代中期まで、国策で調査地域や対象に左右されることはなく、比較的自由に学問的な関心だけで台湾研究ができた。それに対して朝鮮は、1930年代の国策として北進論が重視されていたので、京城帝国大学の調査活動は朝鮮を越えて満洲や内蒙古に範囲を拡大した。この時期、秋葉隆と赤松智城は、日本の政府機関から研究助成金を得て朝鮮から満洲へ調査に出かけており、泉はこの二人から指導を受けていた。馬淵の研究地域を、台湾原住民から東南アジアや太平洋に拡大したのは、南進政策が顕著になった1930年代後半である。馬淵の東南アジア研究は、「南方の拠点」の台湾として南進論の文脈で位置づけて理解されるべきである。

馬淵は理論研究に重きを置き、泉は学術団体の組織者として活躍したのは、個人的な資質の差異に由来する部分大きいだが、二人が教育を受けてフィールドワークをしたのが、南進論の拠点である台湾と北進論の拠点である朝鮮という好対照の場所であったことは、彼らの経験の相違点として重要な意味を持つ。

馬淵は、人類学への理論的な関心から台北帝国大学に進学し、ハーバード大学で人類学を学んだ移川子之蔵から指導を受け、欧米の人類学理論の基礎を身につけた。馬淵は台湾原住民へのフィールドワークを生涯続けていくのだが、彼の発表した論考は、欧米の人類学の研究動向を把握した親族理論が中心であった。1920年代後半から30年代前半にかけて、日本

の国策として北進論がとられた時期であり、南進論とは無縁だったので、馬淵が書いた『台湾高砂族系統所属の研究』は、国家機関からの助成ではなく、私的な寄付による資金で実施されたフィールドワークだった。そのため、国策の影響を免れ、純粋に学問的な見地から研究テーマの設定や調査地の選定をおこなうことができた。

泉と馬淵の調査環境は対照的である。泉は登山経験から人類学を志すようになった。さらに、当時の登山は単に山に登るスポーツというだけでなく、国境地帯の僻地探検と密接な関係があった。1920年代後半から、日本の国策として北進論がとられ、満洲・内蒙古への学術調査は盛んにおこなわれていた。京城帝国大学の赤松と秋葉は、朝鮮全土でシャーマニズムを調査した延長で、「満蒙の宗教と民族」をテーマにし国家機関からの研究助成を受けており、泉は彼らの助手として現地調査をした。泉が満洲での調査経験を学部時代からつんでいるのは、まさに朝鮮から満洲・蒙古へと中国大陆に日本の勢力圏を拡大する北進論の文脈で理解されるべきである。泉が、戦後になってオロチョン族の民族誌を改稿したのは、日本軍関係者が調査の支援をしていた部分であり、それだけ満洲では軍事作戦や民族統治政策が民族誌を作成するフィールドワークと密接に関係していたことを示している。

京城帝国大学の僻地遠征地は蒙疆であり、調査地の交渉相手は日本軍や現地政府であった。泉は、絶えず軍と国家を相手に、調査交渉を重ねていた。泉は、戦時中のニューギニア調査でも、学術探検隊の総務を担当し、終戦間際に京城帝国大学に設置された大陸資源科学研究所でも組織・運営に携わっている。さらに、泉が戦後に博多で創設した在外同胞救護会救療部は、日本政府やGHQとの交渉を重ねて組織を運営していた。これらの経験は、その後も、東京大学アンデス調査隊の組織や国立民族学博物館の開設準備など、組織者として役に立ったのであった。研究と政治が極めて密接な関係にあった北進の拠点である朝鮮という環境が、泉靖一の組織運営能力を鍛えたといえる。

二人の個性的な人類学者は、いずれも戦後の人類学を異なる側面からリードした指導的な研究者である。しかし、それぞれの出身校がもっていた特色を、研究方法として継承したことは、あまり意識されていない。泉は、戦後世代の研究者にアンデス調査隊の組織者として語り継がれているが、その組織と運営は京城帝国時代の経験を敷衍したものである。むしろ、戦闘に巻き込まれたニューギニア調査や、戦後の引揚で極限状態にあった二日市保養所を運営した仕事に比べれば容易だったのではないか。京城帝国大学の研究者たちは、戦争や政治的な難関を乗り越え、文理一体型の調査探検を組織していた。馬淵をはじめとする台北帝国大学の研究者は、戦後、学閥を作るほど連帯感を持たなかったが、京城帝国大学の研究者たちは、戦後「京城人類学派」と呼ばれるほど結束力の強いグループと呼ばれるほど存在感があった。これも広い意味で、台湾と朝鮮の植民地経験の違いから生まれたと言えよう<sup>29</sup>。

## 注

1 本稿は、2014年に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士論文「近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶」の第8章として、馬淵東一と対比させて執筆したが、他の章とのバランスから削

除した部分の一部である。馬淵東一に関しては、別稿で発表している(中生 2003)。

2 梅棹忠夫は、泉靖一の自伝『遙かなる山々』のあとがきで、泉靖一の記憶違いを指摘している(梅棹 1971: 360-361)。梅棹の指摘は、登山に関する部分である。しかしこのことは、泉が曖昧な記憶に基づいて自伝を執筆していることを示しているので、登山以外の部分でも傍証が必要である。

3 高橋文太郎は、1934年以来民俗学を専門として、渋沢敬三とも親交があった。アチック・ミュージアムから『武蔵保谷村郷土資料』を出版している(藤本 1994: 42)。

4 泉哲は、朝鮮の三・一独立運動の直後、台湾統治を批判する文章を発表し、台湾総督府官房調査課長であった東郷実(1881-1959)と論争をしている。泉の論説は、台湾の民族自決を扇動していると受け取られた(若林 2001: 100-101)。

5 例えば、秋葉のアヘンに関する記述は吉岡の調査に依拠している(赤松・秋葉 1941: 100)。泉がおこなった調査も、間接的に宣撫工作の基礎資料になっているのだろう。

6 初出の論文と戦後に出版された本、および著作集で記述が違うことに関しては、ソウル大学全京秀教授から教示を受けた(全 2005b: 142-143)。

7 撮影報道班は、「蒙疆瞥見」という3巻の映画を撮影し、調査の行程を詳細な紀行文と写真で記録している(飯山 1941)。

8 報告書全体の予定では、(1)視察の概況、(2)蒙古人の衣食住、(3)蒙古人の家族構成、(4)超家族的集団であった。原稿として発表されたものは(1)と(2)だけであり、原稿を入稿した後に、泉は兵役についたので、著者校正ができないまま出版されている(京城帝国大学大陸文化研究会編 1939: 249)。原稿が未完成であるためか、この報告書は著作集に収録されていない。

9 泉がボルネオの司政官を断ったので、台湾原住民研究で著名な鹿野忠雄が赴任した。彼は、終戦間際に、ボルネオで消息を絶った(山崎 1992: 305-322)。

10 アルファイからマノクワリの地域を開発候補地として、王子製紙・南洋興発・ニューギニア民政府がここに直営農場を運営していた。王子製紙は伐採班もあり、製材もしていた(田中 1961: 193)。

11 泉靖一は、満洲国立博物館の学芸員の野田光雄と二人で「苦力募集」にでかけ、78名の募集に成功した(田中 1961: 171-172)。泉は、この仕事を通じて、労働力を動員できる基礎としての人口調査のみでなく、現地で労働報酬に何が有益であるかなど、交易の基礎的なデータを集めたと思われる。

12 泉がマレー語やオランダ語を習得していたのか、あるいは通訳を用いたのかは明らかでない。

13 飯山は朝鮮総督府の宣伝課に勤務しており、1936年の朝鮮山岳会メンバーとして白頭山登山、京城帝国大学の蒙疆学術探検隊、そして西ニューギニア資源調査隊に参加して、泉靖一と行動をとともにしていた。特に西ニューギニアには、京城帝国大学の大陸資源科学研究所の仲間とともに参加した(飯山 1962: 30、39、50、81)。田中正四は医療班として参加したが、この調査で人口構成を担当し、泉とともに10集落の人口構成を調べている。その報告書は著書に転載している(田中 1961: 232-236)。田中は、京城帝国大学の土幕民の調査にも参加した経験があり、西ニューギニアの家族構成を朝鮮の土幕民と比較している。この人口調査は、泉の著作にも収録されている(泉・鈴木 1944: 25)。

14 全京秀は、2009年に泉が調査した西ニューギニアを再訪し、さらに泉靖一の当時の調査ノートを遺族より提供されて、詳細な報告書を書いている(全 2013b: 89-93)。

15 泉の所属した班長の佐竹は、内地の放送が雑音のため聞き取れない代わりに、サンフランシスコからの放送はよく聞き取れたと記している。彼らが聴取した日本語放送は、日本軍の被害や軍閥批判の内容だった(佐竹 1963: 239)。

16 この資料は全京秀教授より提供していただいた。全教授は、ソウルの古書店で入手したのだという。日本では、この資料を所蔵する機関はない。

17 第一次は、本稿でのべた1938年の京城帝国大学蒙疆学術探検調査を指している。第二次は、1939年に学生有志が北支蒙疆研究会を作って実施した小規模な調査団のこと(京城帝国大学大陸文化研究会 1940a)。

18 「大陸資源科学研究所官制ヲ定ム」国立公文書館所蔵『公文類聚』第69編(昭和20年)第29巻官職23官制23(朝鮮総督府2)昭和20年6月5日付(請求番号: 本館・2A-013-00・類02913100)。

19 村武精一は、泉靖一が秋葉隆と赤松智城のもとで、朝鮮半島・満蒙・ニューギニア・中央アジアからチベットまで、細かい計画が具体的に立案されていたと述べている（村武 1972：6）。その構想は、当時決して荒唐無稽ではなく、日本の対外拡張戦略に基づいている。ちなみに、藤本英夫は村武の回顧を引用して、この構想が大陸資源研究所の調査・研究の方向性であるとしている（藤本 1994：191）。しかしこの記述は誤りで、本文にあげた公文書の設置趣意書のように、日本軍の南方作戦が頓挫したことで、北方の資源調査が緊急性を増したため、この時期に京城帝国大学が研究所を新設した。そのため、研究所の研究対象は中国北部と満蒙であった。

20 この資料は、ソウル大学人類学部の全京秀教授より教示された。

21 職員は次の通り。所長 今村豊。所員 今村豊、秋葉隆、佐野武雄、木野崎吉郎、岩瀬栄一、木野崎吉郎、安宅勝、北村精一、木村精一、村上恵一、天野利武、森谷克巳、保柳睦美、堀部富男、伊富俊夫、永井莊七郎、泉靖一。

22 今村豊：人的資源としての蒙古人及移住漢人の体能力の研究、人的資源としての満洲国内の漢人移住民の研究、朝鮮人の戦闘力と体格との関係に関する研究、朝鮮人標準体位の決定。

佐藤武雄：満蒙住民の血清学的研究

北村精一：朝鮮人に於ける癩の対策、鴨緑江を中心としての朝鮮及び満洲国内における糸状菌病の分布及びその病原菌の研究①恵山鎮を中心としての鴨緑江における糸状菌病調査及び病原菌の採取、②新義州安東を中心としての平安北道及び安東省に於ける糸状菌病の調査及び病原菌の採取。

秋葉隆：満洲における移住漢人への社会構造（泉共同）。

泉靖一：蒙古人の人口 特に幼青年層の実態、満洲に於ける移住漢人の社会構造（秋葉共同）、朝鮮に於ける農民離村の研究。

森谷克巳：朝鮮を中心とする大陸自給圏に於ける旧来の産業組織と現戦局即応の再編成過程についての研究。

天野利武：満洲に於ける諸民族の民族性の研究、半島労務者の特殊性能についての実験心理学的研究、蒙古人の精神発達に関する調査。

服部敏：北鮮及び北支に於ける地方病の研究（カシン・ベック氏病）。

23 国立民族学博物館で整理中の泉靖一文書を見せていただいた。

24 全京秀は、福岡市のふくふくプラザに保管されている引き揚げ事業に関する資料から、在外同胞援護会の手紙、文書類を発掘し、詳細な活動報告を書いている（全 2013b：100-103）。

25 泉の引き揚げをめぐる課報員的な動きは、全京秀によって、具体的な文書や写真などから裏付けられた（全 2012：126）。

26 泉の自伝、および泉靖一の妻、泉貴美子（1918-1997）の回想録には、博多の診療所について短く言及している（泉 1972b：300-303、泉 1972：110-116）。しかし、組織的な堕胎については書いていない。

27 佐野真一も、泉靖一が組織した二日市保養所で堕胎手術がおこなわれたことに対して関係者から話を聞いている（佐野 2000：86-87）。

28 関雄二は泉靖一のアンデス調査の足跡と学問的展開を丹念にまとめている。ここで、泉が1956年に泉が1年間ハーバード大学で自由に研究し、社会人類学から物質文化研究へ興味を拡大させたことを、アメリカ考古学に接触して感化を受けたことに関連して論じている（関 2011：528-531）。戦後の泉の研究の展開を見るならば、学問の上では関の分析を支持できるが、泉の人生経験の足跡をたどり、本文のように考えた。

29 笠原政治によると、戦後、馬淵と泉は柳田国男の自宅に呼ばれて、戦後の研究テーマをきめられたことがあるという。そのとき、柳田は馬淵に沖縄、泉にアイヌを研究するよう命じた。馬淵は台湾原住民の研究の延長で「部族社会」を研究テーマにしたいと考えていたので、アイヌを泉に割り当てられたことに不満を持っていたという。馬淵と泉は共同で『民族地理』の原稿を書いたこともあった（今西・姫岡・藤岡編 1965）。



## 参考文献

赤松智城・秋葉隆

1941『満蒙の民族と宗教』東京：大阪屋号書店

浅田喬二

1994 (1990)『日本植民地研究史論』東京：未来社

飯山達雄

1941『蒙疆の旅』東京：三省堂

1962『バガボンド12万キロ』東京：富山房

1970『山族・海族：西イリアンに見る文明社会の原型』東京：毎日新聞社

泉哲

1921『植民地統治論』東京：有斐閣

泉靖一

1937「オロチョン族踏査報告」『民族学研究』3巻1号 39-106

1942「総説」『京城帝国大学法学論集』13冊4号 103-109

1954「故杉浦健一教授と人類学・民族学：追悼と評伝」『民族学研究』18巻3号 266-272

1966『済州島』東京：東京大学東洋文化研究所

1969『フィールドワークの記録：文化人類学の実践』東京：講談社

1970「岡正雄先生との出会い」『民族学からみた日本』東京：河出書房新社

1971『泉靖一著作集6 文化人類学に何を求めるか』東京：読売新聞社

1972a『泉靖一著作集1 フィールドワークの記録 (1)』東京：読売新聞社

1972b『泉靖一著作集7 文化人類学の眼』東京：読売新聞社

1972c『泉靖一著作集2 フィールドワークの記録 (2)』東京：読売新聞社

1972d『泉靖一著作集5 文化人類学・思索の旅』東京：読売新聞社

泉靖一・坂本和英・徳永信三

1944『北方遊牧狩猟民族の人口』京城帝国大学第三次蒙疆学術調査隊報告第1号

泉靖一・中山稲雄

1944「西ニューギニア原住民の民族社会学的調査」『ニューギニア調査報告書』7篇、海軍ニューギニア調査隊

泉靖一・鈴木誠

1944『西ニューギニアの民族』東京：日本評論社

泉貴美子

1972『泉靖一と共に』東京：芙蓉書房

今西錦司・姫岡勤・藤岡謙二郎編

1965『民族地理』上下、東京：朝倉書店

梅棹忠夫

1971「泉靖一における山と探検」泉靖一『遙かなる山々』東京：新潮社

上坪隆

1979『水子の譜』東京：現代史出版社

京城帝国大学大陸文化研究会編

1939『蒙疆の自然と文化－京城帝国大学蒙疆学術探検報告書』東京：古今書院

1940a『蒙疆調査報告 昭和14年度報告書』京城：京城帝国大学大陸文化研究会

1940b『大陸文化研究』東京：岩波書店

1943『続大陸文化研究』東京：岩波書店

京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編

1974『紺碧遙かに：京城帝国大学創立五十周年記念誌』東京：京城帝国大学同窓会

全京秀著、山泰幸・金蘭姫訳

2005「アヘンと天皇の植民地／戦争人類学：学問の対民関係」『先端社会研究』2号、関西学院大学出版会、165-203

全京秀著、宮原葉子訳

2010「京城帝国大学の学術調査と「京城学派」の誕生：人類学分野にフォーカスを合わせて」『朝鮮学報』214、1-62

全京秀

2012「東アジアの中の中国・韓国・日本：引揚げを題材として（2011 山口大学東アジア研究科客員教員研究報告）」『東アジア研究』10 巻、119-134

全京秀著、金廣植訳

2013a「特務機関と人類学者が共に作った満蒙民族学：オロチョン族を中心に」石井正己編『帝国日本の昔話・教育・教科書』平成 24 年度広域科学教科教育学研究経費報告書、14 - 40

全京秀著、金炳辰訳

2013b「京城学派の人骨研究と戦時人類学：今村豊の南柯一夢（？）と絆」酒井哲哉・松田利彦編『帝国と高等教育（国際シンポジウム）』国際日本研究センター、73-113

佐竹義輔

1963『西イリアン記』群馬：廣川書店

佐野眞一

2000（1981）『ニッポン発情狂時代：性の王国』東京：筑摩書房

鈴木武雄

1941「序」飯山達雄『蒙疆の旅』東京：三省堂

寺田和夫

1987「泉靖一」石川栄吉他編『文化人類学辞典』東京：弘文堂、51

1981（1975）『日本の人類学』東京：角川書店

蒲生正男

1972「泉靖一先生への追想」『泉靖一著作集第 5 巻 月報 3』読売新聞社

田中正四

1961『瘦骨先生紙屑帖』東京：金剛社

中生勝美

2003 “Mabuchi Tōichi in Maccasar”, Akitoshi Shimizu and Jan van Bremen eds., Wartime Japanese Anthropology in Asia and the Pacific, *Senri Ethnological Studies*, No. 65, Osaka, National Museum of Ethnology, pp.239-272

鳴谷寅雄

1953『日本人の立場から見たニューギニアの価値と開発の重要性』東京：海外移住中央協会

波多江信広

1968『西イリアンの思い出』東京：川島書店

原ひろ子

1972「編者あとがき」泉靖一『泉靖一著作集 5 文化人類学・思索の旅』東京：読売新聞社

藤本英夫

1994『泉靖一伝 アンデスから済州島へ』平凡社

Lattimore, Owen

1933, “The Goldi Tribe: “Fishskin Taatars” of Lower Sungari”, *Memoirs of the American Anthropological Association*, vol.40, 1-77

凌純声

1990（1934）『松花江下游的赫哲族』上海：上海文艺出版社

山崎柄根

1992『鹿野忠雄』東京：平凡社

山崎朋子

2003『朝陽門外の虹：崇貞女学校の人びと』東京：岩波書店

マリノフスキー著、寺田和夫・増田義郎訳

1967「西太平洋の遠洋航海者」泉靖一責任編集『世界の名著 マリノフスキー；レヴィ＝ストロース』東京：中央公論社 (Malinowski, Bronislaw, 1922, *Argonauts of the Western Pacific : an account of native enterprise and adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*, London : G. Routledge)

村武精一

1972「＜兄弟子＞としての泉先生」『泉靖一著作集 月報 7』東京：読売新聞社

若林正文

2001 (1983)『台湾抗日運動史研究＜増補版＞』東京：研文出版